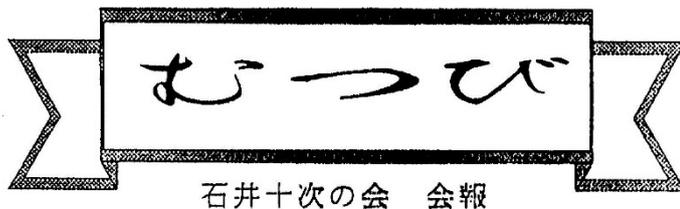


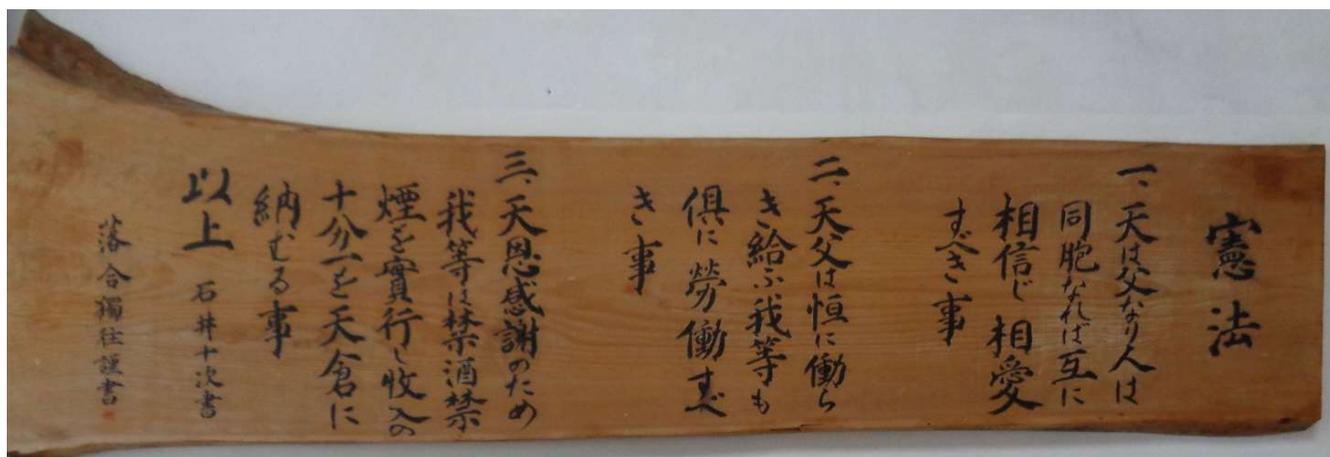
2022年
(令和4年)
5月11日



296号

石井十次先生の教えと木城小・木城中学校の教育目標

木城町立木城小・中学校長 佐藤 健一郎



これは、木城中学校の正面玄関左手に展示されている作品です。

高野槇(こうやまき)に「茶臼原憲法」を書かれた大変立派な書であり、平成15年に設置された記録が残っています。

私は昨年度4月に赴任した際に、一番先に目が留まり、石井十次先生(以下先生と表記させていただきます。)と木城中学校のご縁を感じた瞬間でありました。

先生の教えは現在でも石井記念友愛社によって受け継がれていることは言うまでもありませんが「社会に出て社会に貢献する活力ある人物を輩出せしむる」という先生の教育観は、現在の教育基本法の第1条にある「教育の目的」そのものだと考えます。

だからこそ、学校教育(義務教育)の中でも脈々と息づいている大変重要な考え方となっているとともに、本校の教育目標や重点取組事項の中にもその考え方が活かされていると考えます。本稿ではその一部を紹介させていただきながら、本年度から新しい歴史を踏み出した「木城小・中学校」の紹介も併せてさせていただきます。

本校は本年度から、令和5年度に開校する「木城町立義務教育学校 みどりの杜 木城学園」への移行段階として、教育目標や教育課程に一貫性をもたせた教育を進める、小中一貫型小学校・中学校とし、4月に新たな一步を踏み出しました。

小学校336名、中学校147名 スタッフ64名 総計546名の学校です。

学校経営の基本理念、教育目標、目ざす学校像は以下のように設定しています。

基本理念：「夢を抱き 元気なあいさつと笑顔があふれ 子どもの生命と瞳が輝く 学校づくり」

教育目標：ふるさと木城を愛し 目標をもって主体的に学び 思いやりとやさしさのある
心身共にたくましい 児童生徒を地域と共に育成する

学 校 像：学ぶ楽しさがあふれる学校	(夢実現を図る学校)	〔知〕
やさしさとあいさつがあふれる学校	(笑顔いっぱい为学校)	〔徳〕
明るく元気があふれる学校	(安心・安全な学校)	〔体〕

これらは、先生の教えに通じるものがほとんどであると考えます。

具体的な例を挙げると、夢を抱かせることや目標をもって主体的に学んでいくことについては、先生の考え方である「自立(自己実現)への道」の中に、「将来の目標や夢を、常に繰り返し思い描き～」という一節があります。これは本校で力を入れて取り組んでいるキャリア教育にも通ずるものであります。

また、あいさつについては、生活心得(自戒自立の生活)の中の1番目に、「あいさつをせよ。ありがとうを言え。」とあります。本校においても、人間関係構築の第一歩があいさつだと考え、本年度は学校だけでなく、家庭や地域と協力して、あいさつやありがとうの言える児童生徒の育成をより一層推進していくこととしています。

この他にも重なる部分や通じる部分が多くあるのは、先生の教育に対するお考え(理念)が教育の根幹をなすものであり、普遍的なものであるため、時代が変わっても大切に受け継がれているものと考えます。

私は、先生の教育に対するお考えや情熱、実行力を書籍や映画等で拝見する度に、児童生徒の教育に携わる者として、自己の実践を振り返る際の道標とさせていただいています。

中でも、「石井十次資料館」は、私にとって先生に関する様々な資料を拝見しながら、心静かに自己を振り返る場所となっています。

特に先生と生徒が向き合う「密室教育(ライトナ教育)」の写真の前では、「今、自分は児童生徒や先生方とどのように向き合っているだろうか」と反省しながら、自己と対峙し次への活力を得ています。

そしていつも先生の残された言葉、

「為せよ、屈するなかれ。時重なればその事必ず成らん」

を思い出し、結果が出ないからといってすぐに諦めず、粘り強く試行錯誤を繰り返しながら継続して取り組んでいけば、必ず望ましい方向に道は開かれ、成果が現れるというこの言葉の重みを改めて思い返し、これからどうあればよいか考えています。

今後も木城小・中学校の児童生徒の「夢実現」のために、石井記念友愛園の児嶋園長先生をはじめ職員の皆様とさらなる連携を深めさせていただくと共に、本校全教職員と家庭と地域の方々と共に、「木城ならではの教育」のさらなる充実に誠心誠意努めて参ります。

今後も木城小・中学校の児童生徒の「夢実現」に、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

はじめに

「柿原正一・政一郎父子—石井十次を支えた先人たち」※むつび285号～288号(2021年6～9月号)で柿原正一とその子・政一郎の生き方について見てきた。政一郎については戦前までの活動にとどまったが、彼の活動は戦後も続く。彼は政治家であったが、石井十次に師事し、石井の遺志を継ごうと考えて生きた社会活動家でもあった。無償の奉仕精神で社会の矛盾を解決しようと試みた。政一郎没後60年を迎える今日、政一郎を知る人が少なくなったのは残念である。ここでは戦後の活動に光を当て、あらためて彼の志について考えてみたい。



柿原政一郎

1. 太平洋戦争終わるも、政一郎は原爆に被災する

昭和20年8月6日、広島市宇品の自宅にいた政一郎は、3.5kmの地点に落下した原子爆弾に見舞われ、半壊した家屋の下敷きになった。彼は奇跡的に助かったが、晩年にはその影響かと思われる疾患に苦しむことになる。8月15日、太平洋戦争が終わった。GHQ(連合軍総司令部)は公職追放令を出し、戦争協力者を公職から追放したが、宮崎市長、県会議員、高鍋町長を歴任した柿原政一郎は追放令の対象にならなかった。平和主義者の政一郎は軍部と距離を置き、軍国主義に抵抗。昭和17年に県会議員を辞任し一切の公職から離れ、石井記念協会から託された茶業に力を注いだ。

2. 児嶋琥一郎に十次の遺志を継ぐよう奨める

十次の孫・児嶋琥一郎は東京帝大卒業後、昭和14年に陸軍に入隊しノモンハン事件に従軍。昭和19年再招集で岡山連隊に入隊後、奇しくも高鍋町に国土防衛部隊として駐屯していたとき終戦を迎えた。国土は焦土と化し、戦災孤児や浮浪児は巷にあふれていた。政一郎は琥一郎を幼少のころからよく知っていた。政一郎は琥一郎に、「こんな世情だから、石井先生が残された遺業を継ぐことこそが君の使命ではないか」と、十次の遺志を継ぐことを奨めた。琥一郎は茶臼原に残って戦災犠牲者の救済に献身奉仕することを決意し、昭和20年10月に石井記念友愛社を設立した。政一郎は理事として友愛社を支えた。

3. 政一郎、財団法人正幸会を設立する

昭和22年、政一郎は財団法人正幸会を設立した。正幸会とは、父・正一の遺志を継ぐために、遺産の大半を割いて資金とし、郷土の文教政策に貢献する目的で設立した財団法人である。田原坂で戦死した祖父・正幸の名前をとって「正幸会」とした。政一郎は自ら筆をとり設立趣意書を書いた。

「故柿原正一は高鍋藩士柿原正幸の長男として、維新の風雲急なるうちに生れ、14歳にして父を西南の変に失い、はやくよりつぶさに辛酸をなむ。置県のはじめ、宮崎県雇いとなりてより、全半生を俸給に衣食しつつ志を殖産興業に立て、児湯郡新田村湯風呂谷の官有地払い下げを出願し、明治25年これが許可を得るや僅少の家産と勤儉蓄財とを資本としてここに移住し、畜産に開墾に植林に、あらゆる難苦と戦い、独力経営45年、無人の曠野に戸数15、耕地40町、山林数10町を算する1農村の創作に成功し、74歳を以て昭和12年10月11日天寿をここに終ゆ。(中略) つねに清観院公(七代藩主秋月種茂)以降高鍋藩学の遺風を景仰し、必ず微力を振学興風に致さむことを本願としたりき。(中略) 即ち故人の遺志を行わむがために永逝満10年の日を期してその遺産を寄附し、明倫堂文庫復興を主眼とする財団法人を設立せむと欲す。(後略)」

政一郎は父の背中に清観院公の明倫堂建学の精神「国づくりは人づくり」を見ていたのである。正幸会は図書館や近隣町村に文教政策のための寄附を続けている。(つづく)

お知らせ

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】青山 勇一

【西都市】植野 義也

【習志野市】荻野 清美

★ご寄付をいただきました（敬称略） （一般）

【木城町】森 さち子 山下 トシ子

【高鍋町】長尾 昭 松井 晃

蟻塚クリニック

【西都市】黒木 良直

【宮崎市】福原 美江 竹村 義政

清水 昭男 玉利 カヨ子

皆内 康広

【延岡市】松田 良子

【所沢市】蒲生 俊宏

【西宮市】上牧 鐵雄

【大阪市】山縣 文治

【大分市】姫野 多美子

（奨学金基金へ）

【木城町】石井 雄二 河野 愛

長友 英親

【高鍋町】浦 叶 池内 誠治

（株）あおい会館 高橋 裕子

高橋 紀子 松生 晃

内藤 千紗

【西都市】黒木 郁雄 小田切 美智子

河野 由美子 （株）立生園

【川南町】米田 幸代

【宮崎市】西野 宏 西野 悦子

溝尻 輝政 田村 祥子

芥川 恵子 古賀 義明

黒岩 高広 岡元 ます子

飯尾 彪 石井 献二郎

片平 達也 大松 繁光

藤本 好子 黒木 竜也

永吉 洋次 永吉 智子

中村 浩 越山 理枝

河野 直佐

【延岡市】日高 隆則 横山 裕

【日南市】佐藤 信明

【都城市】徳重 俊一郎

【西宮市】上牧 鐵雄

【君津市】金平 万吉

【東京都】永野 泰三 毛利 尚武

毛利 洋江 三木 健一

三木 俊子 児玉 公人

児玉 千穂美

【取手市】森 邦彦

【横浜市】松井 清

【さいたま市】新福 教一

【京都市】宮崎 道也

【岡山市】馬場 敢

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により4月2

0日までのものとしています。

★6月号の通信発送作業

6月9日（木）9時から印刷・製本

10日（金）9時から製本・発送

コロナ感染状況により中止する場合があります

●新1年生入学

友愛園の園庭は、十次お手植えの静養館前の老梅から始まり、花桃、コブシ、桜、芙蓉、銀杏等の樹木、園内外の紫陽花、彩りのカンナ群が植栽されており、心を癒してくれます。

令和3年度の小学校は4名卒業し、新たに1名が入学しました。約往復3kmの「こころのみち」を通勤することになります。無事故で令和4年度も過ぎればと、児童たちにエールをお送りしたいと思えます。

●生駒 亮編集委員卒業

長きに渡りむつび編集委員として、原稿執筆や編集にご尽力下さいました生駒 亮氏が、令和4年3月で編集委員を卒業されることとなりました。

今までの功労に敬意を表するとともに、ご厚意に感謝申し上げます。ありがとうございました。

～生駒編集委員より～

文筆活動のない私が、同志の方々の力に助けられて、どうにか数年を経過することが出来ました。自分なりに頑張ってきたつもりでしたが、まともな文面になったのかと、疑問に思っています。

コロナ禍の中、会員の皆様健康一番でお過ごし下さい。

*編集後記

むつび巻頭は、木城小・中学校長佐藤健一郎氏からの玉稿を頂きありがとうございました。

毎年恒例の鯉のぼりの掲揚が行われ、友愛園水田の上で150匹が元気に泳いでいます。是非、鑑賞にお越し下さい。

*文責 松下 さおり

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1

後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@ki-jo.jp